

# 自立しよう 独立の気概と面白さを持ち、



佐藤 のりゆき (さとう のりゆき)

テレビキャスター、北海道大学客員教授

1949年札幌生まれ。72年HBCにアナウンサーとして入社、94年HBCアナウンサーからフリーに、番組制作(株)テレベックを設立、TV「のりゆきのトークDE北海道」メインキャスターを18年務める。この4月からHBCラジオ「土曜は朝からのりゆきです!」キャスター。2012年北海道独立研究会を立ち上げる。ソムリエ・ドヌール、医療法人社団延山会理事。主な著書に『のりゆきの痛快対談』『のりゆきの近未来経済』『のりゆきのこれがエッセイ!』『脱パンツ健康法』。

## 総選挙への出馬の話は？

昨年夏から秋の異常なほどの猛暑もすっかり忘れさせたこの冬の厳寒も過ぎ、ようやく遅い春がきた。今冬の程度は極端だが季節の巡りは確かなようである。2013年の日本は、政権交代で明けた。昨年末の解散総選挙で、私は渦にまき込まれた一人である。解散の話がささやかれた昨年春先から私の所にはある政党から、解散になったらぜひ出馬をとの話が持ち込まれた。しっかりした党からの依頼だから、大変ありがたく光栄なことであったが、夏には自分の率直な話をし、感謝し丁寧にしておくをした。

昨年11月末国会は解散。解散した翌朝、我が家の玄関を出ると新聞やテレビの記者が待ち構えており、「もうウラはとれているので、はっきり表明してください!」と言う。大阪の会が北海道は佐藤のりゆきだ、と言っていると言う。カメラマンもカメラを回し始めた。「ちょっと待って下さい!私は大阪から何も聞いていない」。記者たちは首を傾げながら、この後話が来ると言うから、と言いながらしぶしぶ帰った。その日の夕方、今度は別の党の代表から電話があり、「のりさん!あの党から出ることに決まったのか?」「いや私はでない」「では私から断っておいてあげるよ」。私は、ぜひそうして下さいと頼んだ。その後、また電話があり、「あっちは断った。ところで、うちの党から出馬しないか?」。有り難くもあり、戸惑う数日間であった。

やがて選挙戦は今度は反民主の風が吹き、自民党が勝ったわけではないが結果として政権を奪還し2013年が明けた。前回の総選挙と同じように、風に乗った候補者たちが人格も政治能力も知られないまま当選したのである。まさに風に乗って飛ぶ蜘蛛と同じであった。

私は長年テレビキャスターの仕事をしてきて、当然政治には関心がある。政治家との交流も多く、マスコミの世界の人間の中でも、ひとときその関心は高いと思われている。だが私はあの時出馬する選択をすると

きではなかったのである。うまく当選したとしても、一議員として東京に行っている場合ではないと思っていたのである。昨年10月、私が主宰して「北海道独立研究会」を立ち上げたからである。10人の研究会メンバーと議論をし、北海道の政策提言をつくり、道民に訴えようと動き出した矢先だった。

### 北海道独立研究会の立ち上げ

私はこれまで北海道のすべての市町村を取材やら講演で行き、日本も各地を歩き、世界各国も訪れた。そのたびに思うことは、私は北海道を愛していると言うことである。私は北海道生まれ、北海道育ち、仕事人生も北海道である。人一倍北海道の風土に愛着があり、北海道の人間が好きなのだ。北海道独特の気候、生産物、何よりも本州から離れている島国である。独立国になる要素は多分にある。榎本武揚は北海道共和国を唱え、同じ主張をする人たちも過去何人も現れた。50年前の文化人類学者、梅棹忠夫さんの北海道独立論は今読んでも新しい発想に感動する。

しかし、私たちの北海道独立研究会は、北海道を独立国にという夢を見るものではない。独立という気概を持ち、自立しようという目的なのである。その自立も、独立の希望と面白さを持つものでなければならぬと考える。

私は昨年3月末で、18年間続けたテレビ番組「のりゆきのトークDE北海道」のキャスターを辞めた。この頃感じていた北海道の状況は、経済も漂う空気も依然低迷が続き疲弊した沈滞ムードがあり、それは現在も変わらない。

昨年、東京で数々の中央官僚や国会議員に会った。誰と懇談しても北海道のこのことを指摘された。この北海道の活気は「47都道府県の内でも下位だね」と口々に言われる始末。私の現在の北海道観と共通だった。中央に頼り切り、降ってくる金や仕事をあてにし、降ってくるトラブルを解決しようとせず傘をさすだけなのである。北海道にはこんなにやる気がある人たちがいるのに、なぜこんな状況が続くのか、と憤りさえ感じ

たのである。可も取れない、面白さもない、この低迷北海道の責任は地方自治の責任である。20年後、北海道の人口は百万人減少し、ますますこの減少は続く。地方の町や村はどうなるのか。その危機感は感じられない。北海道で生まれ育ち、ここで何十年も仕事をし、やがてこの北海道に骨を埋める私はもう我慢ならないのである。

私が北海道独立研究会を立ち上げようと、大学教授や実業家、医師など10人に呼びかけたが、誰ひとり反対する人もなくすぐ動き出した。そして、今年2月の立ち上げシンポジウムには500名の道民が来てくれた。危機感を背に、夢も面白みもある政策提言をすべく、研究会メンバーは手弁当で集まり議論を重ねている。また、この研究会に賛同してくれた若手実業家やサラリーマンが、「北海道独立研究会EZOアカデミー（青年部）」を立ち上げて応援してくれることになったのも心強い。次回のシンポジウムにもぜひ多くの方が来てくれることを願っている。

また、当誌のこのコーナーは、3回目以降は北海道独立研究会のメンバーが交替で執筆するので愛読いただければうれしく思う。

北海道独立研究会のメンバーは現在下記の面々であるが、今後、我もと思われる方がいれば大歓迎である。

佐藤のりゆき（キャスター、北海道大学客員教授）

大西 雅之（鶴雅グループ代表取締役）

横山 純一（北海学園大学教授）

吉見 宏（北海道大学教授）

遠藤 乾（北海道大学教授）

石崎 岳（北海学園特任教授）

白崎 修一（札幌秀友会病院副院長）

片岡 廣幸（総合商研代表取締役）

浅野 一弘（札幌大学教授）

茂手木貴一（北海道観光振興機構）